

平成29年度山口市・吉南医師会女性部会合同研修会及び懇談会

平川眼科クリニック 武田 知佳

平成30年1月27日18時から山口市湯田温泉の「チャイニーズキッチン 貴」にて山口市医師会より淵上泰敬先生・近藤修先生のご臨席を賜り、山口・吉南医師会女性部会合同研修会と懇談会が開催された。当日の基調講演は、山口赤十字病院女性診療科部長 申神正子先生による「波乱万丈シーボルトの娘 イネの生涯」だった。歴女然とした和服姿で登場し、幕末から明治を生きた日本初の女性医学者イネの生涯を、女性として産婦人科医としての立場から熱く語られた。話の一端をこの紙面にてご紹介する。

長崎を旅すると「おたくさ」と名乗る土産の菓子や、欧州ではシーボルトが持ち込んだ日本原産の紫陽花の学名が「オタクサ」と名付けられている。これらはシーボルトの日本人妻の「滝」の名前に由来したものとの話から講演は始まった。

シーボルトはオランダ政府から派遣され、長崎で医療活動と日本各地から集まった塾生達に、蘭学・医学・自然科学等の授業をしたドイツ人医師である。後に門下生から多くの日本を代表する医学者・科学者・技術者が誕生している。診療に訪れた日本人女性の滝と恋に落ち、滝が19歳の時に娘のイネが誕生している。イネが2歳8か月の時、シーボルトは「シーボルト事件」で国外追放となる。出国の際、門下生で信頼を寄せていた二宮敬作にイネの養育を託していた。イネは混血のため奇異な目で見られ、「オランダイネ」と呼ばれ差別を受けながら滝の元で育つ。母子はシーボルトから愛されていたのであろう、永遠の別れと覚悟していた母子は、シーボルトからカタカナ文字の日本語で書かれた愛情あふれる手紙を受け取っている。イネは、「女が一人で生き抜くには、手に職をつければ」と強い自立を目指す女性に育っていった。イネ14歳の時、滝は「女に学問は不要、学問の道を諦めさせてほしい」旨の手紙を二宮敬作に送る。二宮は尊敬するシーボルトの血を引くイネの学問への情熱を尊重し、イネの指導にあたる。イネは、四国の二宮の元で外科医として西洋医学の基礎を学び、19歳でシーボルトの門下生の岡山の石井宗謙の元で産科学を学ぶ。師の石井に25歳の時「てご

め」にされる。産科医であるイネは自分の妊娠を知ると、望まない性暴力による妊娠を誰に相談することなく一人出産をする。

当時の産科事情は母子ともに死を覚悟したもので、イネは産科を学ぶ中で、「間引き」や「墮胎」の実態、医療水準の低さからの乳児・妊産婦の死亡率の高さ等は実感していた。難産時の母体優先の分娩や新生児管理不備等で多くの不幸な母子を見ており、イネはこれらの現状や環境を熟知した上で覚悟の出産をしたのであった。イネは再度二宮の元で医学勉強に励み、当時、宇和島藩にいた後の大村益次郎にも蘭学の指導を受ける。愛媛県の卯之町には「日本初の女医誕生の地」の碑がある。1859年実施された解剖実習に参加者45名中たった1名の女性としてイネが参加しており、イネは日本初の解剖に参加した女医である。イネの医学に対する向上心・基礎医学に寄せる関心の高さ・キャリアに対する意欲のあらわれであろう。

イネは娘を「天がただで授けたもの」という意味を込めて“タダ”と命名している。一人出産したこと、タダと命名したこと、父親シーボルトが石井に与えていた産科器具の鉗子を取り戻したこと等のエピソードに、「性暴力」という不条理な行為に対する強い憎悪を感じる。タダは滝に育てられる。

追放から30年、シーボルトは追放から解かれ再来日し、日本で西洋医学の講演等をしている。イネの異母弟も日本赤十字社の参与として日本の医療に多大な功績を残している。日本の医療界とシーボルト親子の間に縁を感じる。当時のイネの医療技術は高く評価され、女医として産科や外科の仕事を長崎と東京で多くこなしている。

1875年医術開業試験制度が制定されたが、当時女性には受験資格がなかった。1884年に女性にも門戸が開かれた。既にイネは58歳の高齢に達していたので、受験を断念している。試験制度がある以上、イネは生涯を産婆として過ごした。

現在では、不幸にも強姦と呼ばれる性暴力の被害にあった女性のための相談窓口「あさがお」の存在やアフターピル療法等の紹介や明治

時代に使われていた医療器具の写真の紹介もあった。最近のテレビドラマの「コウノドリ」のポスターの中の「産科医の仕事は毎日が奇跡の中にある」の言葉を紹介され、イネの産婆としての一生を締めくくられた。

イネは、シーボルトの娘であったからこそ多くの指導者に恵まれ、シーボルトの娘であったが為の差別も体験している。女子に教育は不要の社会通念、女子の医術開業試験を拒んだ性差による障壁等乗り越えキャリアアップに努め、母と子に関わる産婆という専門職で活躍した女の一生であった。

現在女性医師が活躍する場が増え、女子学生は医学部学生の30%、女性医師は現役世代の20%を占める時代である。しかし現役女性医師の24%が、非常勤勤務か短時間勤務の形態

で、36歳での女性医師の就業率は76%との統計がある。今に至っても、性別役割分業を前提とした家族形態が存在する現実もある。女性医師が家庭と仕事を両立でき、一時職場を離れた女性医師が仕事に復帰できるように「女性医師復職プロジェクト」が各地で展開され、スキル獲得のための研修などが始まっている。今後、仕事を継続できる仕組みをより発展・充実させ、『ワーク・ライフ・バランス』を重視した女性が働き続けられる社会を次世代の働く女性へとバトンを繋ぐ役割を果たすのが、今の私達の役割なのだと感じさせられたご講演だった。

野瀬橘子会長の女性部会の発展を願うご挨拶があり、閉会となった。

山口・吉南医師会女性部会の多くの先生方のご参加を賜り盛会だった。

